



①にぎわいのあるまちづくり研究会
にぎわいのあるまちづくり研究会
が主催する、今市地域の六斎市。
今市中心市街地に、にぎわいを取り
戻すことを目的として、平成17年
から始まったものです。毎月第3土
曜日に、JR今市駅前通りの一部を
車両通行止めにし、テントなどで
「市」を形成。また、年2回開催し

市民団体による地域活性化

人口減少への対応
市は、平成18年の合併当初から人
口減少が進んでいたため、田舎暮ら
しに憧れる都市部住民への情報提供
を考えました。そして市ホームページ
内に「日光暮らし」を開設し、日
光の魅力を伝える情報や、住む場合
の役立ち情報を発信しています。
また、平成21年には、高齢化の進
む横川（藤原地域）に、農山村生活体
験の家を整備しました。農山村地域
の昔ながらの生活を体験し、地元住
民と交流することで、都市部と日光
市との2地域居住や、将来的な定住
を期待するものです。

②足尾まると井戸端会議
足尾まると井戸端会議は、足尾
の産業遺産や環境学習と観光を結び
つけて、足尾地域の活性化のために
活動する市民団体です。平成19年に
結成し、観光ガイドの育成や案内板
の設置、観光リーフレット・オリジ
ナル弁当・足尾の飲食店マップの作
成などに取り組みました。

現在は、実際に観光客を受け入れ
てガイドツアーを行ったり、足尾銅



市は栗山・足尾地域の生活支援な
どを目的に、協力隊員を採用。10月
末現在、市内では栗山地域に2名
（男女各1名）、足尾地域に1名（男
性）の協力隊員が住み、地域の住民
と交流しながら活動中です。
なお協力隊員は通常、月曜～金曜
日の午前8時30分～午後4時15分、
栗山・足尾の各総合支所総務課に勤
務しています。

地域おこし協力隊員
10月からのテレビドラマで話題と
なった地域おこし協力隊員（以下、
協力隊員）は、国が進める新しい取
り組みです。人口減少や高齢化など
の進行が著しい自治体で、都市部の
人を積極的に招いて定住や定着を図
ることで、人や自然との触れ合いを
強く望む都市部住民のニーズに応え
つつ、地域力の維持・強化につなげ
ることを目的としています。

具体的には、地方の自治体が「地
域社会に貢献したい」「人とのつなが
りを大切にしたい」「自然と共存した
い」との思いを抱く都市部住民を、
協力隊員として採用します。その後、
一定期間以上、農林漁業の応援や住
民の生活支援など、さまざまな地域
協力活動に従事してもらい、同時に、
活動している地域への定住などを働
きかけます。

地域おこし協力隊員

今回は、地域おこし協力隊員の活
動を紹介するとともに、市内各地で
「まちを元気にしたい」と活動する
人やその取り組みを紹介することで、
まちづくりを考えます。

今、市内でも特に人口減少と高齢
化が著しい栗山・足尾地域で、「地
域おこし協力隊員」として、都市部
から移り住んできた若者が生活して
います。まちや人を元気にする、地
域を活性化するという役割を担う
彼らは、それぞれの地域で何を見て、
何を感じ、どんなことに取り組んで
いるのでしょうか。

はじめに
全国各地の地方都市では、さまざ
まな要因が影響し、人口減少と少子
高齢化が急速に進んでいます。
私たちの住む日光市も、同じ状況
に置かれています。3月に策定した
日光市総合計画後期基本計画には、
合併後の6年間で市の人口が4,0
00人以上減少したことや、平成27
年の人口推計が8万7,000人であ
ることが記載されています。

まちの人が減り、高齢者の割合が
高くなると、自治会や地域の行事は
もちろんのこと、組織そのものを維
持することが難しくなっています。

これまでの動きと協力隊員



地域おこし協力隊員の活動と にぎわいを生み出す新たな取り組み



栗山での協力隊員の姿

青山隊員と土屋隊員は、栗山各地で行われる観光イベントの運営を手伝ったり、学校や子どもたちのイベントに参加したりすることで、地域の人とのつながりを深めています。

また高齢者巡回相談では、特技を生かしたマッサージ教室やニュースポーツ体験など、高齢者に新しい体験を提供しています。

さらに6月の平家大祭では、初めてアンケート調査を実施。これは、地域の伝統行事をより良いものにするため、見物客の生の声を聞き、改善点などを探るためのものでした。

モニターツアー

栗山地域では、観光振興のために設置した魅力ある観光地づくり検討委員会が「若い女性にやさしい観光地づくり」の検討を進めています。その中で、若い女性の望むものや、地域の観光資源・宿泊施設などに対する評価を把握するため、10月23日（火）～25日（木）に無料のモニターツアーを初めて実施しました。

条件：①20～35歳の女性である ②

群馬県館林市出身。
東京・恵比寿の広告制作会社に約10年勤務し、ホームページを中心とした広告制作に携わる。
栗山地域のPRのため、個人的にサイトを開設し運営。
＜栗山旅サイト＞
5秒でくりやま (<http://9r8m.jp/>)



あお やま ひろ ゆき
青山 裕之

栗山 地域おこし協力隊員



私の実家は栗山に似たような地域で、少子化の進行を実感しています。また震災後、福島でのボランティア活動で、地域社会を維持する大切さと大変さを目の当たりにしました。これらの経験から、協力隊員として何かできれば、と応募しました。

栗山の自然の中で生活する人が、何より魅力的です。懐に入れば、家族みたいに接してくれますから。

栗山地域は広く、集落ごとに強くまとまっています。しかし高齢化などで集まりを持つことが難しくなっているのが現状で、うまくサポートできる体制を作っていきたいです。

＜インタビュー＞
栗山の魅力や今後について

趣味の旅行を通じて地域振興に興味を持ち、広告制作などの経験を生かしてみたくて隊員に応募しました。栗山地域は時間がすごくゆっくり流れていて、人が他人のことを思う時間が多いように感じます。多くの方がいつも気にかけてくれますし、ストレスを感じないですね。

観光サイトで、名物女将^{おかみ}など人の魅力を紹介しているものはまだ少ないので、今後自分のサイト内で、観光に関する人を紹介していきたい。その実現のため、旅館や人の取材にも、仕事として取り組みたいです。

つち や さ え
土屋 小枝

栗山 地域おこし協力隊員

静岡県下田市出身。
前職は都内でマッサージ師。その腕を高齢者巡回相談などで生かしている。
土呂部地区に畑を借り、野菜作りにも奮闘するなど、栗山を満喫中。



ブログやツイッター、フェイスブックなどで情報発信できる ③ツアーのアンケートに協力できる

主な見学・体験内容：湯西川水の郷、平家の里、蛇王の滝、栗山東照宮、野門そば打ち体験、奥鬼怒トレッキング、奥鬼怒温泉入浴、間欠泉、瀬戸合峡、土呂部ピザ作り体験など

定員20名のところ、短い募集期間にもかかわらず120名の応募がありました。当日は、体調不良などで辞退者が出たものの、同行取材の記者1名を加えた15名が参加しました。

栗山地域を網羅したツアーは、湯西川・奥鬼怒・川俣の3つの温泉、

ばんだいもちや^{いり}、栗刺しなどの名物料理、紅葉真っ盛りの景色と、内容が盛りだくさん。参加者からは笑顔が絶えず、栗山地域の観光を満喫した様子でした。

このツアーには、事務局として青山隊員と土屋隊員も参加。企画段階から関わって、ツアーを問題なく進められるように各方面との調整を図り、当日も参加者を案内しました。

参加者の反応やアンケート結果から、栗山地域の魅力を再認識でき、新たな魅力や課題も発見できました。この結果を、若い女性にやさしい観光地づくりに役立てていきます。

モニターツアー協力者の声

土呂部キャンプ場管理人
山口ウメ子^{やまぐち}さん

今回のモニターツアーを通じて、栗山地域が初めて一つになったと感じました。これまではイベントを各地区ごとに行うだけで、連携して取り組むことはありませんでした。ツアー開催は良かったと思います。

土呂部は栗山地域をバスで移動するルートから外れているので、この

モニターツアー参加者の声

ふりはたゆきこ
降幡幸子^{ふりはた}さん

3日間がとても充実していました。そば打ちやピザ作りなどいろいろな体験ができたし、紅葉もすごくきれいで感動しました。違う季節も見てみたいと思うので、また日光へ行きます。



場所で活動してもらうことに、不安もありました。でも、キャンプ・イン・ドロブツクルに来てくれた女性みんな笑顔で過ごしてくれたし、ピザも「おいしい」と言ってもらえて嬉しかったですね。

反省点として、時間が足りず慌ただしかったこと、調理場以外の施設も見えて欲しかったな、ということがあります。

協力隊員は二人とも、明るく気さくで親しみやすいです。例えば青山さんは、キャンプ場で使う流しそのものの道具を作ってくれたり、土屋さんは料理のアイデアを教えてくださいました。老人会にも関わってくださるし、土呂部に畑を作って頻繁に通ってくれます。おかげで土呂部に活気が出て、地区全体の結び付きが強くなったように感じています。





ども園、日光観光協会足尾出張所、足尾商工会、地域で活動を行なうNPOなど、さまざまな団体と連携しながら活動を展開しています。

WAPの活動

WAT^{ワタラセ}ARASE^{アート}ART^{プロジェクト}PROJECT^{プロジェクト}（以下、WAP）が足尾で活動をはじめたのは平成18年。イベントなどに積極的に参加することで、地元の人たちとも打ち解け、活動は次第に受け入れられていきました。子どもたちと納涼祭の仮装大会などに出場したり、他団体と連携したワークショップを開催したりしています。

足尾での協力隊員の姿

皆川隊員は、地域の祭をはじめとしたイベントに協力する他、高齢者巡回相談で、造形ワークショップやレクリエーションを企画しています。また公民館事業では油絵教室を行うなど、隊員の専門性を活かし、文化・芸術の視点から住民生活に根ざした活動を行なっています。

さらに、足尾小学校や足尾認定こ

WAPの活動では、アートの展示そのものではなく、準備の下地作りを重視しています。展示は外に向けて活動を発信するための手段でしかなく、地元の人たちと協力しながら準備を進めていく過程が重要なのだそうです。

またWAPは、外部からの来訪者の滞在場所づくりにも取り組んでいます。足尾の人の生活の中に入っていくための場所として、地元の人たちの協力の下、空き家を展示会場や

交流の場としてよみがえらせました。そして元地区労働組合の建物は、その名をもじって「モトチクロ」、同様に新聞店の建物は「シンブンシャ」、防空壕^{くわう}があった建物は「ボーケーゴ」と名付けました。シンブンシャは、子どもたちが定期的に集まる活動の場になっています。



子どもたちとこれからの足尾

足尾に来た当初、皆川隊員が氣になつていたのは、子どもたちの将来に、足尾に住むという選択肢がないことでした。しかし、空き家を再生し一緒に創作活動をする中で、少しずつ意識が変わって来たそうです。

あるとき、子どもたちとの会話の中で、かつて足尾に多くの映画館が

あったという話題になり、また映画館を作りたいと言いだした子がいました。すると別の子が「映画館を作るには、まず映画が必要だ」と、ビデオカメラを回して映画を作り始めたのです。「思いついたら躊躇^{ちゅうちよ}せず、まず実行してみる、そんな行動力が、これからのまちおこしには必要でしょう」と皆川隊員は振り返ります。WAPや子どもたちが拠点として

いる建物は、いずれ無くなる日が来ます。しかし、本当に大切なのは建物ではなく、共に集い体験したことだと彼らは感じています。皆川隊員は、「子どもたちの未来を語る上で、WAPのメンバーと共にした時間が、可能性の一つとなれば素晴らしいことです」と目を細めます。

来年、足尾は銅山閉山後40年を迎えます。各種団体がさまざまなイベントを企画していて、来年はこれらの足尾の「まちおこし」を考えていく上での、節目の年とも言えます。子どもたちは、「大人になって足尾を出ても、また戻ってくると約束しよう。夢はそれぞれ違うけど、自分の夢が叶ったときに、足尾でまた一緒に活動ができれば面白いよね」と話しているそうです。

子どもたちの中に生まれた真摯^{しんしん}な思いこそが、明日のまちを作り出していく原動力なのかもしれません。



みな がわ しゅん べい
皆川 俊平

足尾 地域おこし協力隊員

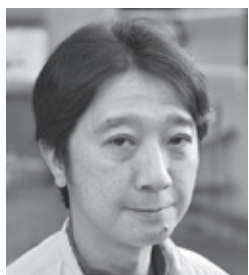
神奈川県藤沢市出身。
東京藝大^{げいだい}大学院博士課程を休学し、地域おこし協力隊員に。
若手芸術家による活動「WAP」の代表で、足尾と群馬県桐生市を結ぶ「わたらせ渓谷鐵道」沿線で、毎年アートイベントを実施。

まちの人の声

おきまちしゅん
萩原純さん

地域おこし協力隊として皆川さんが足尾に来てから、子どもたちが自覚を持つて積極的に行動するようになりました。

以前は静かだった商店街が、今では子どもたちの笑い声であふれ返っています。彼はこのまちの子どもたちの自主性に、



「きつかけ」という名のスパイスを与えてくれました。



「インタビュー」
足尾の魅力や今後について

まちの中に入っていくことで、今まで以上に足尾の魅力が良く分かるようになりました。それは何と言っても足尾の人々とその暮らしぶりです。共同浴場のシステムや鉱員住宅などは、レトロ感が漂っていて、外部の人間から見れば非常に新鮮で魅力的なものです。

かつての足尾はとても栄えていただけに、現状を悲観的、否定的に見ている人が多いのが残念です。しかし、子どもたちは栄えていた時代を知らないため、現状を受け入れることが容易です。

まちおこしを考えると、問題意識を持つと、現状を否定的に捉えがちですが、子どもたちにはそれがありません。現状から夢を見られるのです。その夢を大きくしていくためにも、大人は誇りを持つて、かつての足尾の繁栄の歴史や文化、伝統などを伝えていくことが重要でしょう。これからのまちおこしは、若い無垢な力抜きには考えられません。古いものを大切にしつつ、「今」から何を生み出していくのかを考え、世代を超えてビジョンを共有していければ、足尾は変わっていけると思います。

にぎわいを作り出す 新しい取り組み

栗山・足尾地域以外でも、地域を盛り上げていこうという取り組みが起っています。

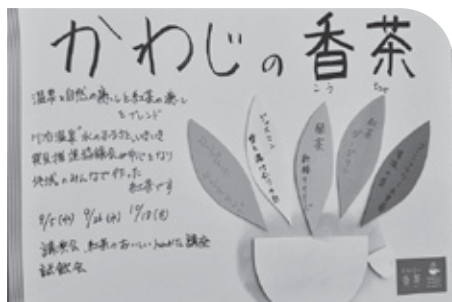
ここでは、川治温泉(藤原地域)での紅茶を使ったまちおこし、東武日光駅周辺(日光地域)でのマルシェ、小代(今市地域)で造形作家が始めた作り手と客のふれあいイベントについて、それぞれの関係者に話を聞きました。



日光マルシェ



こしろ
ルネッサンス



かわじの香茶



◆日光マルシェ

岡井健さん

日光マルシェはまちを楽しんでもらうための「市」です。平成22年から、日光地域の東武・JR日光駅周辺(世界遺産地域の周辺)で開催しています。この秋の開催で5回を数えました。

消費者と生産者が直接売買するマルシェは、全国的に行われています。そんな他地域のマルシェに大きく触発されたことが、日光マルシェをはじめたきっかけです。また同時に「まち」を強く意識し、「空間を使う」「まちを巡る」の二つを実現したかったことや、地元



実行委員長の岡井さん(中央)と委員の皆さん

した。

これらの理由で、会場は駅前広場や公園、神社の境内、店先の小空間など、さまざまな場所を借り、同時多発型で開催しています。各会場を巡りながら、日光の店や街並み、風景を季節ごとに感じて欲しいという狙いがあります。

当初は街並み景観の検討や活性化など、一連のまちづくり活動に取り組みNPO法人日光門前まちづくりが主催していましたが、この秋の開催から実行委員会組織として新たなスタートを切りました。始めて2年ほどの若い企画で、まだまだ試行錯誤中ですが、マルシェを通じて少しずつ人の輪が広がってきました。今後も、引き続き新たな人のつながりを生み出すことや、日光のブランドやイメージの創出などの一助となれば、と考えています。

また、日光は観光地であり、膨大なコミュニケーションの中で商売が成り立っている土地柄です。例えばこのマルシェの場を、そうした売上の教育にも役立てられないか、と思索中です。多くの人が楽しめる、街なかのお祭りの一つとなれるように、取り組みでいきたいと思っています。

◆かわじの香茶

坂内剛至さん

「川治温泉水のふるさといきいき発見推進協議会」(以下、協議会)は、川治温泉の魅力を発信するために組織した団体です。ノルディックウォーキング(専用ポールを2本持つて歩くスポーツ)やカナディアンカヌー体験、モニターツアーなど、各種イベントやおもてなし事業を展開しています。今回、近年増えつつあるアウトドア女子のニーズに対応すべく、これまでの川治温泉のもてなしに足りなかった「食」の部分の補完を図りました。それが紅茶の開発です。まちおこしに紅茶を選んだ理由は、ほっとできる飲み物で女



協議会の藤井弘子さん(左)と坂内さん(右)

性が喜ぶ演出をしたかったから。川治温泉が、若い女性のたくさん来る観光地になれば最高ですね。開発に当たっては、紅茶によるまちおこしを手がけている専門家、根本氏の協力を仰ぎました。協議会の方針が、地元の人たちの多くの賛同を集め、川治のまちが一体となつて開発に取り組みました。地元の人たちが持つ川治温泉のイメージを具体化するため、紅茶にはあまりブレンドしない緑茶を用いて新緑を表現しました。さらにコーンフラワーで清流の青を、ローズピンクでヤシオツツジのピンクを、ジャスミンで雪と湯煙の白をそれぞれ表現し、美しい見た目にもこだわった「かわじの香茶」が完成しました。

協議会には、地元の人たちが大勢集まり、サンプルの試飲や商品名の投票をしました。川治温泉に掛ける地元の思いが凝縮されています。

今後は更なる新商品の展開を考えています。それには販売を担う川治の旅館やホテルの努力が重要です。紅茶を使った菓子類や入浴剤、「かわじの湯」などの足湯に期間限定の紅茶風呂を作るなどの仕掛けをしていきたいですね。

◆こしろルネッサンス

渡辺貞継さん

現在の小代は一人暮らしや二人暮らしの家が多く、5年後・10年後は空き家が増えて、地域の安全が保てなくなると思います。

空き家になる前に、若者が小代に目を向け、住んでくれるような「何か」を出来ないかと考えたとき、作品の展示会を思い付きました。自分の木工家具とおいの鍛鉄製品を展示する「二人展」を開催すると、思いのほか人が集まりました。打ち上げで「続けようか」との話になり、イベント名を考えたととき、ふつと浮かんだのが「こしろルネッサンス」。イベントとして定着させるため、毎月1回、第3日曜日に開催することと、参



代表の和田憲治さん(左)と渡辺さん(右)

加を希望する作家には加わってもらうことを決めました。

2年間、毎月開催するのは大変な面があるものの、お金をかけず無理をせず、自分たちにできることをできる範囲でやってきました。特にお客さんとのふれあいや交流を重要視していて、メディアを使つてのPRは行っていない。イベントに来た人が、作家たちと話したり触れ合ったりすることで、次につながります。利益目的ではイベントは定着しません。まずはお客さんと出展者との接点を築くことが大切で、その結果が販売につながり、結びつくのだと思います。また、イベントは単なる継続では飽きられてしまうので、常に変化していく必要があるでしょう。

今後は、公民館や学校と連携したイベントをやってみたいですね。落合中学校には、学校と住民が協力して整備した遊歩道があり、雰囲気がとてもすばらしい。実際に歩いてみて、こしろルネッサンスの会場で使えたら、と思いました。毎月第3日曜日は、市内の駅に降りるとどこにでも、お客さんと作家の出会いの場である「店」がある、そんな「こころルネッサンス」になつたらいいなあ。

古民家再生の可能性

人口減少とともに問題となりつつある空き家。その対策を考えたとき、取り壊すのではなく、修理して新しい価値を加え再利用する、という選択肢があります。

築100年を超える古民家を改修し、4月に旅館（簡易宿所）、茅葺の宿三男坊を開業した渡辺悦雄さん（今市）に話を聞きました。

生家の保存と旅館業

茅葺屋根の日本家屋である生家。どのようにに残し活用していくか。母が生家を離れて空き家になった後、会員制の休暇施設としました。ところが次第に会員の物置と化していき活用方法の見直しを考えていた2年前、会が解散となりました。

家を維持し残していく方法を改めて考えたとき、宿が浮かびました。宿ならお客さんが家の中を歩いてくれるので、風通しが良くなります。

また、宿での利益を維持管理費に充てることができ、長く保存していく際の負担が減らせます。平日は仕事がありますが、土曜日一泊だけの宿なら、自分で管理人をやれて、料理でもてなしもできると考えました。

平成23年2月から修繕を開始。使えるものはそのままで雰囲気を残しながら、畳を板張りにしたり、客室のふすまを板戸にしたりと、管理しやすいように直しました。ヒノキ林で薄暗かった裏山を伐採し、広葉樹に植え替えて環境も整備。そして平成24年4月、土曜日1泊のみの、茅葺の宿「三男坊」を開業しました。

外観、内装とも現代的なものを排して、雰囲気大切にしています。作りたてにこだわった妻の手料理は、特別なメニューではありませんが、お客さんは残さず完食してくれます。また野菜や卵の収穫を、体験したり見学したりすることもできます。ここへは「泊まること」を目的に来る人がほとんど。特に旅行プランを立てず、宿で過ごすのんびりした時間を楽しめ、自分の時間を満喫している様子ですね。「居心地がいい」とリピーターも増えていて、喜んでもらえるのでやって良かったと思っています。

古民家再生について

県内では古民家を、食事の提供を伴う旅館に再生した前例がなく、県が宿泊や飲食の許可を出すためには、条例整備が必要でした。私は全国各地の事例などを調べて県に提出し、何度も働きかけましたが、許可までに1年4カ月かかりました。また、開業には5つの許可（旅館業・食品衛生・建築基準・浄化槽の排水・防火に関するもの）が必要で、大変な部分もありました。古民家や空家の再生を考えても、許可の取り方が分からず、諦めてしまう人が多いように思います。今回、私が前例を作ったので、今後県内では許可が下りや



すくなるはず。また私の経験が誰かの役に立つ、誰かの力になれる部分もあるのかな、と思っています。古民家に限らず、古い家の再生は、直し過ぎないことが大切。専門家に全てを任せて直し過ぎると、ありきで個性が無くなる危険性もあります。全てを任せるのではなく、自分でできることは楽しみなが、自分でやってみませんか。

いずれにしても、古いもの・古い家を生かすことができる、そんな日光市であって欲しいですね。

担当職員に聞く

市は今年度、自治会やNPOの活動支援や、地域のにぎわいづくり支援を強化するため、地域振興課を設置しました。

具体的な支援策や今後について、地域振興課の職員に話を聞きました。

地域活性化と自治活動支援

地域振興課では、人口の減少が特に著しい過疎地域や高齢化集落などの山間地域の活性化支援、自治会やNPOなど、自発的に活動する市民団体への支援を行っています。

過疎地域支援策の一つとして、平成23年度から受け入れた地域おこし協力隊員が、地域に溶け込み活躍しているのは嬉しいことです。来年度は、栗山地域で現隊員の他に2名の新規隊員を受け入れ、さらに活性化を図る予定です。

また、特に山間地域では、移動手段が無く、買い物などの外出すら困難な方が多い集落や、高齢化率が高く冬の除雪への対応が困難な集落があります。これらの集落のため、買い物支援制度の確立や、除雪ボランティア交流事業をより一層進めたいと考えています。さらに、市内の空き家情報を移住希望者に提供する制度を整え、日光市への移住人口の増加を図ります。

一方で、自治会などの地域コミュニティや市民団体に対しても、積極的な支援を行っています。



日光市は市民の皆さんとの協働によるまちづくりを進めています。明るく活気のあるまちづくりには、皆さんとの協力関係が欠かせません。そこで現在、自治会活動への支援やボランティア団体・NPOの活動支援、市民が主体となつて活動しているまちづくり団体への補助金交付などを行っています。

今後はさらに、同じ思いを持った団体が集まれる場の創出や、地域づくりの担い手を育てる人材育成研修などの支援にも、力を入れていきたいですね。現在活動を行っている方はもちろん、これから団体を立ち上げて活動したいという方も、気軽にご相談ください。

地域振興・市民団体支援について

地域振興課 ☎(21)5147



ふくだ こうじ 福田浩士 主査

おわりに

日光がふるさとではないからこそ持つ新鮮な視点で、地域の眠れる魅力を開き起こしつつある協力隊員たち。人とのつながりを築き、大切にしながら、今後も栗山・足尾地域の活性化に取り組んでいきます。

また、以前から地域活性化に取り組む人たちも、活動を続けています。ふるさとに新たなにぎわいをつくり出そうと活動する人たちは、人とのつながりを大切にしながら、自分たちの力で、自分たちにできることから取り組んでいます。

そこには、まちを元気にしたい、日光を元気にしたい、との思いがあり、活動の原動力になっています。

市が進める市民との協働によるまちづくりは、どちらかに任せきりにするのではなく、「魅力あふれる日光市を一緒につくろう」ということです。難しいことはありません。なぜなら、自分の住む地域の行事に参加することが、まちづくりにつながっていくのですから…。

あなたも、まちづくりの第一歩を踏み出しましょう。

この特集についてくわしくは…

秘書広報課 広報広聴係